

## 保育指導案と振り返り

満3歳児(9月1日現在 入園児7名 慣らし保育児4名 計11名) 河合理沙

### 1. 活動名

生き物になりきって動こう

### 2. 子どもの姿と読み取り

◎ABCDE児(入園児)F児(5月中旬慣らし保育開始)について

- ・保護者と離れることに不安なく喜んで登園してくる子どもが多く、「〇〇する」「〇〇したい」など保育者に自分のしたいことを伝えたり、水遊びでは前日と同じような遊び方をしたりと、気に入っている遊びや以前にして楽しかったことなど、そのときに自分がしたいことを見つけて遊んでいる。
- ・以前は保育者と数人の子どもたちが始めた遊びに他児が寄り集まってきていたが、保育者がいなくとも、誰かが遊び始めると近くに居合わせた他児が寄り、4~5人で同じ場で遊ぶ姿も増えてきている。また、その中で、同じような道具を使って水遊びをしたり、隣の友達と同じものをイメージしながら全く違う形のをブロックで作ったりと、同じようなことをして遊ぶ姿も見られるようになってきている。保育者と遊ぶだけでなく、近くにいる友達同士で遊ぶことも楽しくなり、近くの友達がしていることから刺激を受けているようだ。
- ・登園後の荷物の始末など毎日していることは、保育者の誘い掛けがなくても自分からしようしたり、用意をしている友達の姿を見て、することに気づいたりする姿が増えてきている。また、着替えや排泄など、保育者の手を借りながらも自分でしようとする子どもが増えてきている。毎日行っている身の回りのことに自分で気づいたことを保育者に伝えたり、自分でできたことを喜んだりしており、自分で身の回りのことができて嬉しかったり、自慢げに思ったりしており、そこからさらに意欲的になっているようだ。
- ・暑い日には、長い時間水遊びをする子どもも多い。ためた水に全身浸かったり、シャワーヘッドから噴水のように水を出し、「雨!」と浴びることを喜んだり、その水に近づいたり逃げたりして、全身濡れてダイナミックに遊ぶ子どもがいる。一方で、近くにあるいろいろな道具を使って水を移し替えたり、いろいろな道具を使うこと自体を楽しんだり、ままごとのごはんを作ったりしてじっくりと遊ぶ姿もある。どちらも何回も同じことをしたり、自分なりにいろいろな方法でやってみたりしている。また、保育者や近くの友達がしていることを見て、自分も同じような道具を使ったり、同じようなことをしようとしている。

◎GHIJK 児について

- ・G児(5月下旬慣らし保育開始)は、6月までは喜んで登園していたが、母親の出産が近くなってきたこともあってか、先週から母親と離れることを嫌がって登園しにくい日がある。登園後「ママと遊ぶ」など離れにくいことも多いが、保育者に抱かれて受け入れられることで、泣きながらも母親に対し自ら手を振るなど葛藤が見られる。姿が見えなくなると自分のしたいことを見つけて遊ぶことから、保護者と離れて過ごすことに不安はないようだ。遊びに意欲的で、気に入った遊びは日を超えても繰り返し遊ぶ姿が見られる。
- ・H児(5月下旬慣らし保育開始)は、保護者と離れることに敏感になり、登園しにくい日が多かったが、離れて過ごすことに対する不安が少しずつ減ってきており、登園後自ら母親に「バイバイ」と手を振る姿もあるなど、スムーズに保護者と離れるようになってきた。保育者を積極的に誘って、自分の行きたいところに行ったり、したいことをしようしたりしている。周囲に他児が多くいて、自分の思いが通りにくいと感じると、「いやだ」と保育者の手を強く引くことも多い。自分のしたいことや興味のあることに対して思いが強く、保育者に対してその自分の思いや要求を出すようになってきている。また、興味のあることやその時にしたいことに対して強い思いがあるが、気分も変わりやすく、特に近くに遊んでいる他児がいることで興味に移ったり、自ら積極的に関わりにいったりすることが多い。近くにいる他児に興味をもったり、他児がいることで楽しい雰囲気を感じたりしているようだ。さらに、送迎時に他児の保護者に対しても手を繋ごうとしたりして積極的に関わりに行くようになり、自分の周囲の人への関心が高まっているようだ。
- ・I児(5月下旬慣らし保育開始)は、目についた楽しそうなことを一人で楽しむことが多い。だが、「かわせんせ」と保育者の名前をしきりに呼んだり、簡単な言葉や身振りなどで保育者に思いを伝えようしたり、近くにいる他児に抱きつくなどして関わろうとすることが増えてきた。毎日一緒に過ごしている保育者や友達に親しみを持つようになってきているようだ。

・J児（6月下旬慣らし保育開始）は、保育者に受け入れられることで、泣くことなく保護者と離れられることが多くなってきた。保育者が移動するたびに遊びをやめて自分も行くこととするなど、保育者のそばで遊ぶことが多いが、保育者が保育室前の戸外で遊んでいても、保育室で遊ぶ姿も少しずつ見られるようになってきた。目の届く範囲に保育者がいることで安心して過ごしているようだ。

・K児（1学期最終日慣らし保育開始）は、登園後母親と離れることはためらいなくスムーズだが、慣らし保育初日だったためか、時折保育室から外を見たり、降園時間が近づくとつれて母親の姿を探したりする様子がある。促さずとも保育室やその周辺で過ごしており、親子登園などの積み重ねにより、保育室が“楽しい場所”“自分の知っている場所”になりつつあるようだ。他児がしている遊びに興味をもって自分もしてみようとしたり、目についた遊びをしたり、気に入った遊びはしばらく一人で遊び続けたりと、遊びへの意欲がある。

◎全体的な傾向（みんなと一緒にする活動、生き物とのかかわりに関して）

・カタツムリのエサの野菜が無くなっていると、「ごはんもらいに行こう」と保育者を誘って一緒に用務員に野菜をもらいに行ったり、カタツムリがうんちをしていることに気づき、保育者に知らせたりする子どもがいる。また、ダンゴムシを登園途中に見つけてきたり、園内で探して集めたり、集めたダンゴムシの様子を見たりしている子どももいる。さらに、保育室内にトンボが入ってくるのがよくあり、興味をもって追いかけたり、様子をじっと見たりしている子どもが多い。近くにいる虫など生き物に興味を持っている。一方で、D児は特に飛ぶ虫やアリが苦手で、近くに来ると泣いて保育者に助けを求める。

・保育者に「お名前呼ぶやつしよう」と言ったり、「今日はこれ読んで」と好きな絵本を持ってきたりして、みんなと一緒に集まる場面を楽しみにしている子どもが多い。他児の名前を覚えていて大きな声で呼んだり、流れがわかって保育者の代わりに「せーの」と掛け声をする子どももいる。また、返事は反応がさまざまで、いつもと違った返事の仕方をする子がいると、他児が真似ることも多い。毎日していることの中で、自分なりに考えてアレンジしたり、他児のそれをおもしろいと感じ、自分もやってみようとしているようだ。

・トンボが保育室に入ってきたときに、トンボを捕まえようとしたり、捕まえたトンボを間近で見たりして、思わずG児トンボになって動いていたことをきっかけに、みんなでトンボになって動く遊びをした。その翌日も子どもたちから自然とトンボになって動く姿が見られ、毎日みんなで行っているうちにカエルやウサギ、ヘビ、テントウムシなどになる子どもの姿も見られるようになってきている。友達がしたことを見て真似たり、やっているうちに自分なりにとらえている生き物の動きをしようとすることを楽しんでいる。

### 3. 目指す子どもの姿

互いの存在受け入れ合い、ともに園生活を送ることを楽しむ。

### 4. 活動の目標（ねらい）

○身近な生き物に興味をもってかかわり、自分なりに動きや特徴を捉える。（知識及び技能の基礎）

○身近な生き物の動きや特徴を自分なりに体を動かして表現する。（思考力・判断力・表現力の基礎）

○保育者や友達と一緒に同じような動きをして遊ぶことを楽しむ。（学びに向かう力・人間性等）

### 5. 評価規準

知識及び技能の基礎	思考力・判断力・表現力等の基礎	学びに向かう力・人間性等
① 身近な生き物の動きを捉える。	① 自分なりに捉えた特徴を身体で表現する。	① 一緒に活動することを楽しむ。
② 身近な生き物の体や生態の特徴を捉える。		② 友達や保育者がしている動きを真似る。

### 6. 環境構成

活動内容の設定理由

・まずは自分の身近にいる生き物に対して興味をもってほしい。

・自分なりの表現をすることを楽しんでほしい。

- ・クラスのみならず一緒に活動する楽しさを感じてほしい。
- ・自分だけでなく、友達や保育者がしていることを見て真似ることで、いろいろな感じ方や表現の仕方を受け入れる良さを感じてほしい。
- ・自分の表現を友達や保育者に真似られることで、無意識に受け入れられていると感じてほしい。

#### 教材について

- ・園内でもよく見られる虫や、絵本などでよく題材となるような動物など、身近な生き物にすることで、子どもたち自身がその特徴を捉え、表現できるようにする。

#### 展開の工夫

- (・普段の保育の中で、身近な虫と関わりながら、動きや生態について興味をもてるようにするとともに、自分たちと同じように食事や排泄、睡眠など生活していることを感じられるようにする。)
- ・はじめに、この活動のきっかけになったトンボの動きをみんなで楽しむ。よくしている流れで始めることで、することがわかり、活動に入り込みやすいようにする。
- ・その後、動くうちに子どもから出てきた発想を受け入れながら遊ぶことで、それぞれの表現を存分に楽しめるようにする。(・生き物になって動くだけでなく、“寝る”“食事をする”などごっこ遊びに展開していき、よりその生き物を身近に感じられるようにする。)

## 7. ESD との関連

### 活動を通して養いたい ESD の視点

#### ・多様性

身近な生き物に興味をもってかかわる中で、さまざまな生き物の姿や動きがあること、自分たち人間と同じように個体差があることなどに無意識でも触れていってほしい。また、同じ生き物とかかわる中でも一人一人の感じ方も違えば、表現の仕方も違うことでの面白さを感じることで、いろいろある良さを感じていってほしい。

#### ・公平性

誰のどのような表現であっても、保育者からも他児からも真似られることで認められることを感じ、一人一人の存在や考え、思いが尊重されることを感じてほしい。

### 活動を通して主に育てたい ESD の資質能力

#### ・コミュニケーションを行う力

特に小さい年齢であるため、言語的なコミュニケーションではなく、互いに真似て、真似られてということを通して、非言語でもコミュニケーションし、つながっていく感覚を養いたい。

#### ・つながりを尊重する態度

みんなと一緒に楽しく過ごしながら互い表現を認め合うなかで、同じ場をともに過ごす楽しさ、他者とつながっていく心地よさを感じられるようにし、今後他者や社会とつながりをもっていくための基礎を養いたい。

### ESD で育てたい価値観

#### ・世代内の公正

誰のどのような表現であっても、保育者からも他児からも真似られることで認められることを感じ、一人一人の存在や考え、思いが尊重されることを感じてほしい。

#### ・生物多様性の重視

いろいろな生き物になりきって動くことで、多様であることの面白さを感じ、ゆくゆくは生き物の多様性を尊重する態度の基礎を養いたい。

#### ・幸福感に敏感になる

ささやかな活動の中でも、楽しさや心地よさを感じとり、それを大切にしたい。

### 貢献できる SDGs

- ・目標15:陸上資源
- ・目標16:平和・公正

## 8.展開

予想される子どもの活動	保育者の環境構成と援助
<ul style="list-style-type: none"> <li>・『とんぼのめがね』を歌ったり、トンボになって動いたりする。</li> <li>・自分の知っている身近な生き物になって動く。</li> <li>・友達や保育者がしている動きを真似て動く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・よくしている流れで始めることで、することがわかり、活動に入り込みやすいようにする。</li> <li>・動くうちに子どもから出てきた発想を保育者が率先して子どもの動きを真似ることで、それぞれの表現を存分に楽しめるようにする。</li> <li>・友達のしていることを真似て動き出した子どもの姿を認めることで、みんなで同じ動きを楽しむきっかけになるようにする。</li> </ul>

## 9.振り返り記録

- ・広い場にしておいたこともあってか、保育者が『とんぼのめがね』を歌うと、子どもたちは思わず腕を広げ動き出した。
- ・歌の終わりで、B 児が保育者に対してカエルの動きをして見せた。A 児はその姿を見てすぐに真似をし始め、保育者が真似ると他児も同じ動きをし始めた。G 児はこけて手足をバタバタさせたりする動きもしていた。
- ・長くカエルの動きを楽しんだあと、G 児が「今度はバッタだよ」と話した。保育者が「バッタってどなん？」と聞くと、ジャンプしながら手をばたつかせて見せた。保育者が真似すると、他児も同じようにジャンプしながら手をばたつかせて動く。
- ・続いて、保育者が「疲れた～」と座りこむと、子どもたちも一緒になって座り、誰かが「ご飯食べよう」と言うと、ご飯の食べ真似をしたり、横になって寝たりする子どももいた。



## 10.成果と課題

昨年度は、クラスの子どもの誕生日のたびに必ず行う“誕生会”を、一斉活動の保育案として ESD の視点から考えた。だが、満3歳児クラスの特長として、入園月がそれぞれ違うこと、年齢的に集団活動が難しいことから、みんなと一緒にする一斉活動についての保育案をたてることの難しさがあった。しかし今年度は、偶然のきっかけから子どもたち自身が自然と動き出したことから発想を得て、保育指導案をたてることができた。小さい年齢のうちから、保育者が ESD の視点から保育を考え、日々子どもたちと接していくことが、とても重要であることを今回改めて感じる事ができた。引き続き、初めての集団生活をスタートさせる子どもたちにとって、幼稚園という場で“人との交歓”をどう感じ、“利他的な行為”に繋がっていくのか、また、身近な環境から“自然との交歓”をどう得ていくのかを考えていきたい。

園の目指す子ども像

創造する

思いをもってトキメキとヒラメキを繰り返す子ども

人とともに

ありのままを分かり合い、活かし合い、分かち合う子ども

地球の中で

身の回りのものごとにトキメキ、自分事として捉え、自らかかわる子ども

生き物になりきって動こう(9月4日)

- 自分なりに身近な生き物の動きや特徴を捉える。(知識及び技能の基礎)
- 捉えた身近な生き物の動きや特徴を、自分なりに体の動きなどで表現する。(思考力・判断力・表現力等の基礎)
- 保育者や友達と一緒に同じような動きをして遊ぶことを楽しむ。(学びに向かう力・人間性等)

ESD で重視する能力・態度が揺さぶられる子どもの姿

○コミュニケーションを行う力

言語的なコミュニケーションではなく、互いに真似て、真似られてということを通して、非言語でもコミュニケーションすることの楽しさを感じる。

○つながりを尊重する態度

クラスの友達と一緒に楽しく過ごしながらい表現を認め合うなかで、同じ場をともに過ごす楽しさ、他者とつながっていく心地よさを感じる。

ねらい(1学期の終わり頃)

- したい遊びや興味のあることを繰り返し楽しんだり、自分なりに試したりしながら遊ぶ。
- 保育者やしたい遊びが同じ友達と一緒に、同じようなことをして遊ぶことを楽しむ。
- 自分で気づいたり、保育者の誘いかけにより、簡単な身の回りのことをしようしたり、できたことを喜んだりする。



保育者との信頼関係や、安心できる場にいることで、自分から遊びに動き出すようになる。

クラスで集う時間に喜んで参加する。

自分のしたいことを見つけて、繰り返し楽しむ。

保育者やクラスの友達と一緒に、同じ場で遊ぶことを楽しむ。

幼稚園での生活の仕方がわかってきている。



絵本の読み聞かせや、お返事をするなど、クラスで集う時間に気持ちを寄せるようになっていく。



保育者だけでなく、近くにいる友達のしていることを真似て、同じような道具を使ってみたり、同じようなことをやってみたりするようになっている。

生活面のすることがわかるようになり、保育者の声かけにより行動に移そうとする姿が多い。「できた」ということが嬉しく、さらに意欲的になってきている。



気に入ったこと、おもしろいと思ったことを何度も楽しんだり、自分なりにいろいろな方法でやってみる。